

教育と医学



2020 9・10 第68巻5号 目次

連載

特集 読み書き支援の最前線——そのメカニズムと難しさ

特集にあたって

読み書きのメカニズムと難しさ

徳永 豊 2

読み書きの困難さとは何か

宇野 彰 4

読み書きの困難とその学習支援——ワーキングメモリ理論の観点から

湯澤正通 14

読みのプロセスと「見る力」

奥村智人 30

読み書きの難しさとテクノロジーの活用

平林ルミ 36

読み書きの困難と合理的配慮

佐藤克敏 44

読み書きの難しさと自分たちの工夫

藤堂栄子・柴田章弘 52

〈教育のリアル〉 部活動という聖域

内田 良 22

〈再考「発達障害」〉 良いコミュニケーションを育てるために必要なこと

篠山大明 62

〈希望をつくる教育デザイン〉 試験の仕組みを大改善する

南谷和範 76

「コンピュータ適応型テスト」の魅力

江藤真美子 84

〈未来をひらく健康教育〉 「靴隠し」と子どもたち

江藤真美子 84

特別支援教育のページ▼久里浜だよりII発達障害教育推進センターの「人材育成プロジェクト」

江藤真美子 84

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

江藤真美子 84

●五反田家の子どもたち 71 ●バリアフリー絵本の世界 73

新刊情報 61／教育と医学関連の雑誌情報 13／特集題目一覧 92／編集後記 96

表紙イラスト・デザイン 中尾 悠

読み書きのメカニズムと難しさ

徳永 豊

特別支援教育の視点で、子どもの特性に応じた授業の工夫が充実してきた。この特性に応じた工夫のひとつに、「読み書き」に難しさを示す子どもへの対応がある。「読み書き」とは、学校においては教科書を読むこと、また文章を書くことであり、授業における基本的な活動である。読むことを通して、文字から情報を得ることができ、その情報を作者と共有することにつながる。書くことを通して、自分が考えていることを整理したり、その考えを他者に表現したりする。そうすることで、その考えを他者と共有することにつながる。国語科だけでなく、算数（数学）や理科、社会などの教科においても「読み書き」を避けては授業や学びが成立しない。この読み書きについて、子どもは小学校入学前後に、さまざまな活動や国語科の授業で、その基本を身につける。そして数行の文章を読んだり、書いたりすることができるようになる。

しかしながら、この読んだり書いたりすることに苦労している子どもたちがいる。どのようにすれば他の子どもと同じように読んだり書いたりできるのかについて苦しみ続けている

とくなが ゆたか

福岡大学人文学部教育・臨床心理学科教授。
公認心理師、臨床心理士。専門は特別支援教育、発達臨床。九州大学大学院博士課程単位取得退学。国立特別支援教育総合研究所を経て現職。著書に『重度・重複障害児の対人相互交渉における共同注意』（慶應義塾大学出版会、二〇〇九年）、『障害の重い子どもの目標設定ガイド』（編著、同、二〇一四年）、『障害の重い子どもの発達理解ガイド』（編著、同、二〇一九年）など。

る。その子なりに、人一倍の努力を重ねても、なかなか改善しない。なぜ、どうして、自分には難しいのか、この答えが見つからず思い悩む。

このように、日常生活において、当たり前前のごが難しいこと、できないことをどう考えればいだろうか。

「目の前に『りんご』があり、そこに手を伸ばしてつかむ」、この当たり前前のごが難しい、どうすればこの動作がうまくできるようになるのだろうか。これが学生時代の関心のテーマだった。手や腕があつて、それを動かすための筋の働きもちゃんとしている、でも、「りんごをつかむこと」が難しい、その背後にどのような心理学的なメカニズムがあり、どこでつまづいているのか、その子の体験している難しさを推測しつつ支援を考えてきた。そこで分かったことは、「りんごをつかむこと」は当たり前前のごではなく、さまざまな過程・段階と細やかな心理学的メカニズムがあつて、人はそれらを瞬時に実現していて、とてつもなくすごいことである、ということだった。

今回の特集のテーマである「読み書き」についても、日常的には当たり前前のごであるが、その背後には複雑な心理学的なメカニズムがあると考えられる。読んだり書いたりすることに苦労している子どもは、それらのメカニズムのどこかでつまづいていて、本来であれば、自動的に処理されている部分がうまくいかない。この特集では、読んだり書いたりする行動のメカニズムをどのように理解するのか、またその難しさをどのように評価しつつ実態把握をするのかを検討する。また、その難しさを踏まえて、どのような支援が効果的なのかについて考える。具体的には、学校や家庭で取り組まれてきた工夫を含め、当事者や家族の困難さや苦勞、対応などその実践を知る機会となればと企画した。読むことや書くことに苦勞している子どもや家族へのアドバイスにつながれば、と考える。

読み書きの困難さとは何か

宇野 彰

「読み書き」とは

通常「読み」とは、音読、黙読、読解を、「書き」とは、文字形態の想起、書字運動、書かれた文字形態を含む広い意味をあらわす用語とされます。近年、子供たちに多くみられる「読み書き障害」と呼ばれている困難さは、「発達性読み書き障害（発達性ディスレクシア）」のことを指すことが多いと思われます。この

「発達性読み書き障害」とは、文字（列）から音韻（列）への変換の障害、もしくは音韻（列）から文字（列）への変換の障害を言います。すなわち、「読み」に関しては読解を含みませんし、「書き」には書字運動や書かれた文字形態は含まれませんので、文字（列）から音に変換する段階（黙読の場合には頭の中では音になっている場合）と音から文字形態を想起する段階と考えられています。

うの・あきら

NPO法人LD・Dyslexiaセンター理事長。
発達性ディスレクシア研究会理事長。医学博士。言語聴覚士。専門は発達認知神経心理学。国立精神・神経センター精神保健研究所治療研究室長、筑波大学教授兼筑波大学附属桐が丘特別支援学校長を経て現職。著書に『うちの子は字が書けないかも』と書いたら（ポプラ社、二〇二〇年）、『改訂版標準読み書きスクリーニング検査（STRAW-R）』（インテルナ出版、二〇一七年）など。

「読み書き」の障害

上述の「発達性読み書き障害」は、「ディスレクシア」と呼ばれることが少なくありません。しかし、この「ディスレクシア」という用語は、診断名としても、読みが困難であるという症状名としても使用されることが少なくないため、混乱を起こしやすい用語なのです。例えば、「風邪」は診断名で「熱発、咳、鼻水」などは症状ですが、診断名と症状名が同じ場合には、「今日風邪が大変でさあ、もしかしたら風邪かもしれない」と訳がわからない表現になってしまします。また、この「ディスレクシア」には、先天性と考えられ発達期に明らかになる前述の「発達性ディスレクシア」に加えて、大脳の損傷後に生じる「後天性ディスレクシア」は成人でも小児にもみられますので、「発達性ディスレクシア」だけを「ディスレクシア」とは呼べないのです。したがって、単に「ディスレクシア」とだけ呼ばずに、「発達性」を付けていただきたいと思います。

さて、この「ディスレクシア」は、直訳しますと

「読みの障害」なのですが、「読みの障害」があると多くの場合、「書く障害（書字障害）」が伴います。難読症、識字障害、読み障害、などと訳した場合、書字障害を見逃す可能性があります。書字障害は、読み障害よりも出現頻度が多いため、多くの困難な状態を見逃すことになりますので、是非「読み」だけでなく「読み書き障害」と、そして前述の「発達性」を加えて「発達性読み書き障害」と翻訳していただきたいと思っています。

生物学的背景

この「発達性読み書き障害」の背景に、生物学的な原因によって生じていることに異議を唱える専門家は少ないと思います。すなわち、大脳の何らかの問題によって生じていると考えられています。大脳の問題というと、大変な問題があるように思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、そんなことはありません。おそらく各個人が感じている苦手なことは大脳の働き（機能）が何らかの理由で、十分に活発になっていないことが原因と思われます。誰にでもある苦手さ困難さ